

「黄禍」と新日本

——「黄禍」思想への対応——

飯 倉 章

《Summary》

**The Yellow Peril and “New” Japan :
The Japanese Response to the Yellow Peril**

Akira Iikura*

This essay attempts to examine the Japanese response to the Yellow Peril idea. First, the reactions of Hirobumi Ito, a Japanese leader during the Meiji period, will be taken up. His response to the idea showed a combination of national pride as well as a denunciation of the Yellow peril idea. This belief is not peculiar to Ito alone. Ogai Mori expressed a paradoxical view on a Yellow Peril idea in a German historian's book. According to Ogai, as the potential of China was overestimated, so the power of Japan was underestimated in the book. Therefore, when he denied the Yellow Peril idea of that book, he showed his uneasiness with the apparent denigration of the Japanese and their placement at the same level as other yellow races. Contrary to the Japanese reaction, some Chinese intellectuals used the idea to activate Chinese nationalism. For the Chinese, yellow is a sacred color as it is the color of Yellow Emperor. The denunciation of the Yellow Peril idea tended to stimulate Japanese national pride and promote pan-Asian ideas such as “Asia for the Asian”. Japanese oligarchs, the decision-makers of Meiji Japan, however, deliberately avoided the nationalistic reaction to the Yellow Peril as well as pan-Asianism since they did not want to stir anti-white feelings in Japan.

* 城西国際大学専任講師・研究員

はじめに

「黄禍」とは、19世紀末から20世紀初頭にかけて西洋世界に流布した、黄色人種とその国家、特に日本や中国の勃興が、白色人種や白人国家に対して脅威となるという考えである。本稿では、日本が「黄禍」として、あるときは公然と、またあるときは暗黙のうちに名指しされたことに対して、当時、日本の知識人や政治家がどのような態度をとったかを、中国の同時代人の対応との比較も交えながら、明らかにする。

この「黄禍」思想を西洋世界にもっとも積極的に喧伝した人物がドイツ皇帝ヴィルヘルム二世であること、またそれが西洋世界に広まるきっかけとなったのが、カイザーの画案になる寓意画であることは、つとに知られている。三国干渉の後にロシア皇帝ニコライ二世に贈呈されたこの寓意画は、西洋世界にセンセーショナルな話題を提供した。「黄禍」の説明には、カイザーとこの寓意画は欠かすことができない（以前にも論じたように、最初こそカイザーの黄色人種脅威論にも、カイザーの寓意画にも、「黄禍」の二文字は冠されていなかったが、世紀の変わり目には早くも、カイザーの考えは「黄禍」思想と呼ばれ、その寓意画は「黄禍の図」と呼ばれ始めた⁽¹⁾）。そこで本稿では、カイザーの寓意画と「黄禍」思想を中心に、それと同時進行的に喧伝されて、日本にも紹介された「黄禍」思想を取りあげて、とくに日清戦争と日露戦争の間の戦間期の議論を中心にして、中国の知識人・革命家の対応と比較しながら、日本の知識人・政治家がそれらに対してどのように対応したかを考察する。

I. カイザーの寓意画と日本

1. 伊藤博文と「黄禍」の図

伊藤博文は、その絵の前で足をとめた。絵の中では、武装した乙女たちが高台に立っている。その頭上には十字架がある。高台の先端、乙女たちの先頭には、大天使ミカエルがいて、左手を掲げ、対岸を示している。そこには黒煙をあげて、炎が燃えさかっている。なかでも伊藤の目は、わき上がる煙と炎の奥にいる龍と、その上に座っている仏陀に釘付けになった。

1901年9月、米欧訪問の旅に出た伊藤博文は、英国にその年の12月下旬に到着して、翌

1902年初めまで滞在した。その絵を伊藤が目にしたのは、そのときのことであった⁽²⁾。

伊藤の外遊の目的は、名目上は米国のエール大学から名誉博士号の授与を受けることであった。だが、本当の目的は、ロシアを訪問し、個人の資格ではあるが、日露協商交渉に臨むことにあった。

日清戦争後、朝鮮への支配を確実なものとしようとしていた日本にとって、最大の脅威は、遼東半島を租借し、中国東北部に進出していたロシアであった。当時、日本政府内は、ロシアとの争いを避けて協調の道を探ろうとする日露協商論者と、英国との同盟によりロシアを牽制しようとする日英同盟論者とに分かれていた。元老伊藤博文は、前者の代表であった。

伊藤は、個人的にロシアと折衝するために欧州へと向かったが、その頃、日英政府間では、日英同盟交渉が予想外の進展を見せ、締結へあと少しというところまで漕ぎ着けていた。伊藤がロシア側と交渉することは、結果的に二元外交となり、英国側の疑念を招きかねない。11月、駐英公使林董はわざわざパリに滞在する伊藤のもとを訪ね、日英同盟にたいする理解を求めた。伊藤は林の説得を受けて消極的賛意を示したと言われるが、持論である日露協商は諦めず、12月の初めにロシアの首都サンクト・ペテルブルクでロシア外相ラムスドルフと折衝をおこなった。しかし、会談後、ベルリンに移った伊藤のもとに届けられたロシア側の回答は強硬なもので、伊藤を失望させた。伊藤は、ラムスドルフに日露協定交渉打ち切りを通告して英国に渡った。

日露協商論者であるため、日英同盟にはその分消極的であった伊藤を英国で待っていたのは、皮肉にも英国側の熱烈な歓迎であった。12月26日には、英国首相ソールズベリーによる歓迎大晩餐会が催された。翌日には、国王エドワード七世に謁見している。そのような挫折の旅の締めくくりに皮肉な歓迎の日々のなか、訪れたモーブレイ・ハウスで、伊藤はその絵、その頃すでに「黄禍の図」と呼ばれ始めていたドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の原案になる寓意画を目にしたのである。

「これは日本である！」

伊藤は、絵のなかの東洋のイメージ、龍とその上の仏陀を指さして叫んだ。同行していた英国を代表するジャーナリスト、W・T・ステッドは、驚いて反論した。

「カイザーは、仏陀で黄禍を象徴しようとしたのですが、とくに日本とは言っておりません」

それは、当時の英国で一般的に受け入れられている考えであった。しかし、「ちがう」と伊藤は言い張った。

「カイザーにとって、それは日本のつもりだったのだ。それがカイザーの真意である」

実は伊藤はこの外遊で、その寓意画の生みの親であるカイザー自身に拝謁している。1901年12月14日のことである。そのとき、カイザーは、伊藤を「東洋のビスマルク」と賞賛した。いささかうがった見方をすれば、これには皮肉な響きがなくもない。1888年、祖父と父親が相次いで亡くなり、帝位を継承したヴィルヘルム二世が最初に直面したのは、老ビスマルクとの対立であり、最終的にはビスマルクを罷免しているからである。英国で寓意画を前にして、伊藤の脳裏には、つい2、3週間前に拝謁したときのカイザーの姿が浮かんだことだろう。

ところで、伊藤によるカイザーの寓意画の解釈は、「失言」ともなりかねない危うさをはらんでいた。少なくとも、日本政府は、日本が「黄禍」とみなされ、白人種の西洋国家から孤立することを恐れていた。カイザーが日本を「黄禍」とみなしているという解釈を強調することは、日本を「黄禍」として認めることに結びつきかねない。しかも、それが時の元老伊藤博文の口からとなると、なおさらのことである。現にこの逸話は、親露派のステッドの筆によって、意図的に日露戦争中に英国の雑誌に紹介されたのである。

しかし、そのような危うさを恐らくは意識しながらも、伊藤はそう言わずにいられなかったのである。ここでの伊藤の発言には、当時の日本の指導者・知識人の「黄禍」にたいする逆説的な感情が読みとれる。「黄禍」を唾棄すべきものと否定しながらも、もしもそのような脅威が存在するのであれば、その指導者は日本でなければならないと彼らの多くは考えていたのである。伊藤は別の機会に、こうも述べている。「黄禍」があるとするならば、それは「不能状態の中国ではなく、極東の新興強国の日本だけである」⁽³⁾。

しかし、そもその初めに、このカイザーの寓意画が日本に紹介されたときの反応はどんなものだったろうか。次には時代を遡って、カイザーの寓意画の紹介の経緯を追ってみたい。

2. カイザーの寓意画の日本への紹介

カイザーが最初の寓意画を描いたのは、1895年夏であり、その原画がロシア皇帝に贈られたり、複製が西洋の王室や政治指導者に贈られたのは、この年のうちのことである。伊藤が見たのも、この複製のうちの一つであろう（周知のように、ドイツ王室と英国王室とは当時、姻戚関係を持っていた。ヴィルヘルム二世は、ヴィクトリア女王の娘、王女ヴィクトリアの息子である）。またこの寓意画は、グラビア写真となって、ドイツでは官庁やドイツ汽船に飾られた。さらに半ば公式とも言えるこの寓意画の解釈が、遅くとも11月に

は『北ドイツ新聞』に掲載されている⁽⁴⁾。これらから推察すると、日本にも遅くとも1895年の終わりから1896年の初めには、その寓意画の存在が知られるようになったと考えられる。

ひとつの興味深いエピソードは、1896年3月14日に明治天皇が、この画を見ていることである。『明治天皇紀』の「外務大臣黄禍の圖を上る」という記述によれば、「外務大臣伯爵陸奥宗光、獨逸國皇帝ウィルヘルム二世の描ける黄禍の圖を獻る、圖は獨帝の日清戦役後に於ける日本の勃興を想ひ、将来の恐るべきを諷刺し、基督教國の相團結して之れに當らざるべからざるの意を寓せるものなり」とある⁽⁵⁾。

明治天皇がこの寓意画を見て、どのような感想を持ったかは、これだけの叙述ではうかがい知る余地もないが、この部分の出典である『内大臣府文書』と『徳大寺實則日記』は全面非公開であるため、それ以上のことは分からない。日本の皇室は、明治20年(1887年)にドイツ人、オットマール・フォン・マールを宮内省顧問として招き、プロイセン王室の組織、儀礼、慣行を導入して、近代化を図っている。このように両宮廷間の関係は深かっただけに、明治天皇の心境は複雑であったろう。

もっともこの部分の叙述には、幾つか疑問点がある。たとえば、1896年3月の時点では、ヴィルヘルムの寓意画はまだ「黄禍の図」と呼ばれてはいなかったと思う。この画がそう呼ばれ始めた時点を正確に特定することは困難であるが、少なくともこれより何年か後と考えられる。ここでの記述に「黄禍の図」とあるのは、後からそう呼ばれるようになり、一般に広まったため、『明治天皇紀』編纂段階や出典の文献が整理されたときに、この名称が付け加えられたと考えられる。

また外務大臣陸奥宗光が「獻る」とあるが、これも疑問である。当時、陸奥外相は持病の肺疾患が悪化して病氣療養中であった。確かに陸奥外相は、2月に朝鮮王宮内でのクーデター事件とそれに伴い朝鮮国王がロシア公使館に移るという事態が起こり、その処理のため一時的に帰京して官邸で執務をしていたが、かなり病状は悪化していた(この頃、ベルツ医師などは、外相を辞任して、静養に努めることを勧告している)⁽⁶⁾。問題の3月14日の朝には、再び静養のため、大磯に出発している⁽⁷⁾。明治天皇に直に上奏する機会はなかったのである。

ならば誰が上奏したのだろうか。それは、1895年6月から臨時代理外相を努めていた文部大臣の西園寺公望であると思われる。実際、その3月14日のことを記した翌日の新聞には、「外相の参内」と題して、「西園寺代理外務大臣は昨日午前十時参内 天顔に咫尺し何事かを上奏同十一時過る頃退出されたり」とある⁽⁸⁾。何やら重要なことを、直々に上奏し

たという意味深な表現である。おそらく、この時に西園寺が代理として「黄禍の図」を見せ、また外交方針などを上奏したのではなかろうか。『明治天皇紀』にも3月14日、「文部大臣西園寺公望に謁を賜ふ」とある。

ところで、この14日の前日の13日には、伊藤博文首相、大山巖陸軍大臣、西郷従道海軍大臣、西園寺公望文部大臣、山縣有朋大将、黒田清隆枢密院議長、井上馨伯爵らが、陸奥外相邸に集まって、「何事か密議」を交わしたという。その主たる議題は、ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式に出席する機会を利用して、日露間の朝鮮問題交渉をおこなう際の条件などを詰めることにあった⁽⁹⁾（その後、遺露大使山縣有朋は、5月にニコライ二世戴冠式に出席し、6月には朝鮮をめぐる日露間の協定、山縣・ロバノフ協定を結んだ）。この元老らが一同に会したときに、カイザーの寓意画が披露されたであろうことは想像に難くない。いずれにしろ明治天皇が目にしてるのであるから、それ以前に元老らにこれを見る機会があったのは間違いないだろう。

明治天皇にカイザーの寓意画を上奏したというこのエピソードは、細かい経緯はともかく、当時の元老たちが、この寓意画を慎重に扱い、機密と言えれば大げさであるが、それに近い対応をしていたことを物語っているように思われる（もっとも、ほぼ同時期にこの寓意画の存在は、雑誌を通して日本の一般人も知るところとなるのであるが）。過剰反応と言え、言い過ぎかもしれないが、明治の実質的政策決定者であった元老たちは、ちょっとした人種的異質論にも敏感であったと言える。カイザーの寓意画を前にして、彼らは自分たちが西洋に近づこうとすればするほど、西洋が夏の逃げ水のように遠ざかってしまう、そんな絶望感を感じたかもしれない。西洋化、すなわち近代化を理想とし、それをある程度、果たしながらも、当時の国家のヒエラルキー（文明国を頂点とし、半文明国、未開国がそれに続く階層構造）のなかで、非西洋人の国家であるが故に、いつまでも文明国の地位を認められないのではという、条約改正交渉などで味わった絶望感を思い出したかもしれない。しかし、彼らはそのような意識から排外的なナショナリズムに走ろうとはしなかった。

ところで、この元老や明治天皇が目にした寓意画は、むしろ本物ではなかったが、それを模写した複製だったのだろうか。模写であったかもしれないし、当時既に普及していた写真凹版印刷（グラビア印刷）技術を用いて大量生産された写真であったかもしれない。あるいは、雑誌などに掲載されたグラビア写真であったかもしれない。筆者は、最後の可能性も否定できないと思っている。それは次に考察するように、ちょうどこの頃に、あるアメリカの雑誌にカイザーの寓意画が写真付きで紹介されているからである。

3. 米国版『レビュー・オブ・レビューズ』誌と小松緑

「東洋の情勢は、ドイツ皇帝の鋭い精神を強力に刺激し続けている」。アメリカ版『レビュー・オブ・レビューズ』誌、1896年1月号の「ドイツの観点から見た極東の情勢」という記事は、こんな書き出しで始まっている。同誌は、カイザーには新聞の編集者の方が、現在の地位よりふさわしいかもしれなかったと述べて、こう続けている。「このことはカイザー自身も感じていると思われる。それに、数週間前には、カイザーは政治風刺漫画家として登場して、彼の臣民を驚かせた——これはまさに編集者の地位を目指しての大きな一歩とみなされるかもしれない。我々は許可を得て、本紙の口絵として、これを複写した」⁽¹⁰⁾。

そして、まさにこの記事の見開きのページに、このカイザーの寓意画が掲載されている。ちなみに題は「皇帝ヴィルヘルムの風刺画——ヨーロッパの諸国民よ！ 汝らの信仰と故国の防御に加われ！——」である⁽¹¹⁾。この雑誌が船便で日本に到着し、識者あるいは政府関係者の目にとまった可能性は十分あると思われる。

少なくとも一人の評者は、この寓意画に早い段階から注目していた。それは慶応義塾大学、ついで米国のエール、プリンストン大学で政治学を修め、帰国後、陸奥宗光に見出されて外務省に出仕した小松緑である。小松は、早くも1896年5月20日号の雑誌『太陽』に寄稿した「對外策」⁽¹²⁾という論評で、このカイザーの寓意画を紹介している。まず小松は、日清戦争の勝利後、西洋世界に日本脅威論がわき起こったことを例を挙げて紹介している。たとえば、英国の『ペル・メル・ガゼット』紙⁽¹³⁾は、「日本他日支邦を併せ此の敏捷 (Adroitness) に彼の堅忍 (Solidity) を加へ以て天下に臨まば誰か克く之を禦がん」と論じ、日本と中国の連携を警戒した。また、米国版『レビュー・オブ・レビューズ』誌は、日本を一度血を嘗めた「虎狼」にたとえて、まさに「東亜の群羊」を呑み込もうとしていると論じた。小松は続けて次のように書いた。「智畧に名ある獨帝ウ井リアムは親ら擬畫を描いて之を露皇に贈り極東の恠物遂に泰西を擾乱すべきを示したり」。この「擬畫」が言うまでもなく、カイザーの寓意画である。

小松はこのような論評が疑心暗鬼から生じたものと論じながらも、「彼れ銀色人が我が金色族」を疑い恐れるのも、理由がないわけではないと、アッチラやジンギス・カーンなどを例としてあげている。小松緑は、「極東無聞の一小土」である日本が、4億もの人口を抱える「大清」を破ったことにより、欧米が恐れ驚きふるえるのもやむを得ないとし、日本の富国強兵策がこのような脅威論を刺激していると指摘している。小松は富国強兵を

立国のための当然の務めとしながらも、日本の軍備拡張は防衛のためであり、ロシアやフランスと張り合うためではなく、また日本の貿易振興も、英米の商権を脅かすためではないと力説した。そのために「立国の本務」のほかに二心がない日本の真意を明らかにすべきと述べている。

小松の議論で興味深いのは、「臥薪嘗胆」論や、三国干渉という「会稽の恥」をそそぐといった議論に表れている、ナショナリズムに傾斜した当時の国論を批判していることである。彼は三国干渉による遼東半島還付は決して恥辱ではないと主張した。一つには償金の上に、遼東まで割譲せよというのは、清国に対して酷な要求であること、また干渉はその当時には一般的なことであり、決して三国干渉のみが特殊ではないからというのである。小松は更に、ロシアが「狂暴の国」ではなく、むしろ「義侠に類する」行動を取ることも少なくなかったと、親露的意見を述べている。一方で小松は、三国干渉の背景にあるのは、ロシア、ドイツ、フランスの日本にたいする嫉妬ではなく、英国への嫉妬であると述べ、さらに、にわかに「日英同盟を説くが如き浅識短慮の誹を免れざるなり」とまで論じ、いかなる場合でも「英は同盟すべきものに非ず」と日英同盟論を排している。小松の議論は、当時すでに親英派と親露派に分かれていた国論の一方を表したものであり、果たしてそれは伊藤博文の親露的傾向に通じるものであった。前にも述べたように小松は、陸奥に見出され、伊藤に仕えた人間である（後に『伊藤公全集』全三巻を小松が編集したことからも、その親密さがうかがえるであろう）。小松の親露的姿勢が伊藤の共感を得たのかは定かでないが、彼はこの年に外務省翻訳官に登用されている。いささか大胆な憶測をすれば、陸奥や伊藤にカイザーの寓意画のことを知らせたのも小松であったかもしれない。つまり、米国版『レビュー・オブ・レビューズ』誌、小松緑、陸奥宗光、伊藤博文、ほかの元老たち、さらに明治天皇が、このカイザーの寓意画を通して一本の線で繋がるかもしれない。もちろん発見者が、伊藤自身であった可能性もある。伊藤は、英語に堪能で、読解能力にたけており、海外事情に注意を払い、自ら英米の雑誌に目を通すことも多かった。そんな伊藤のアンテナに、この米国版『レビュー・オブ・レビューズ』誌の論説がひっかかった可能性も否定はできない。

4. 三国干渉に刺激された人種意識

日清戦争の勝利と三国干渉の「屈辱」を経て、日本国民の間には、「臥薪嘗胆」論という形でナショナリズムが芽生え、発展した。このナショナリズムは、民族意識とともに人種対抗意識も含んでいた。ある知識人は、1896年にこう書いている。

……我國は此時に當りて未だ決して満足すべきに非ず。僅かに強國の仲間入りをなしたるが如きも、而も歐洲人の最も嫌忌する干涉を行へるの舉動を見るも、猶歐人の我を同等視せざるを知るに足るべし。抑歐米人は同一人種の間には同情を表し、艱難危急相救ふの情を抱けりと雖も、異人種に就ては毫も同等の感を有せず、随て又同情の此間に生ずるなし、一言すれば現今の世界は人種の競争なり⁽¹⁴⁾。

この文章は、法科大学教授、寺尾亨の筆になるものである。寺尾は、1892年にフランス、ベルギーに留学し、国際法を学び、1895年9月に帰朝して、法科大学教授に再任された。言ってみれば、パリパリの国際法学者であった。寺尾は、人種間の融和が不可能とみて、欧米人と同等の地位に進もうとするならば、日本は国力の充実につとめて、外国の援助同盟をあてにせず、「獨立獨行東洋人を以て東洋を処理するの策」を取るべきであると述べている。寺尾は続けて、「臥薪嘗胆」を単なる一時期の流行語とはせず、真に「大國民の大氣象を養はん事、是實に余が我國民に熱望して措かざる所なり」と結んでいる⁽¹⁵⁾。

このような言説に現れているのは、芽生え始めたナショナリズムであるとともに、人種対抗意識である。ナショナリズムと人種対抗意識は、むろん理論の上では区別できる。しかし、実際には、矛盾をはらみながら、分かれ難くからみあっていることが多い。人種対抗意識では、「東洋人の東洋」が叫ばれる。一方、ナショナリズムにおいては、その同じ東洋の朝鮮人や中国人と自らを区別する意識が、あるときには露骨な差別的な言説になって現れる。言い換えれば、一方では汎アジア主義を説きながら、一方では日本を除くアジア諸國民を自らより下に置くのである、それも「進歩」とか「文明」という西洋流の物差しを基準として。これは一見すると矛盾している考えのようにも見えるが、この矛盾を止揚する思想がなかった訳ではない。それは、日本が指導民族として、アジアを解放するという考えであり、これがまさに大東亜共栄圏の思想につながって行くのである。

早くも日清戦争後、汎アジア主義は、当時の外交の選択肢の一つとして論じられるようになっていく。国際法学者の有賀長雄は、自ら創刊に尽力した『外交時報』誌に、「東亞外交の十大問題」という論説を寄稿し、そのなかで日本は将来「アジア人のアジア」という主義を取るべきか、あるいは欧州列強間の結びつきに加わり自国利益の伸張を図るべきかと問題提起している。とくに清国が開国進取を国是とした場合や、國民が団結して革新政府を作った場合、またそのような動きに日本の去就が影響する場合にはどうするか。有賀はこのような問題提起をしたが、これには直接答えなかった⁽¹⁶⁾。しかし、別の機会にこれを論じたときには、「アジアはアジア人にて」の主義は、捨てがたいものであると述

べている。ただし結論では、現下の形勢では、東アジアの国々で一郭をなすことはできないとして、ともかく列強の「伍班」に入って行動を共にするのはやむを得ないと論じている⁽¹⁷⁾。

有賀は自重したが、近衛篤磨はそうでなかった。明治31年（1898年）1月1日号の雑誌『太陽』に、近衛は有名な「同人種同盟、附支那問題研究の必要」を発表して、すべての「黄人種国は大に同人種保護の策を講ぜざる可からず」と、人種同盟論を説いている⁽¹⁸⁾。また高山樗牛が著名な人種対立観（ただし、それはチュラニアン民族とアリアン民族の対立で、高山によれば日本は前者の最後の代表である）を論じたのもこの頃である。高山は同時期に日本主義、国家至上主義を唱えている。彼のなかでは、人種対立観とナショナリズムは、とくに大きな矛盾をはらむことなく共存している。それは「日本と支那帝国とは、世界に於ける最後のツラン人種の国家として、相抱擁し、相提撕〔引き立て合う〕して、その運命を共にすべきことを誓うべきにあらずや」という日中の連携をはかる考えが、背景にあったからであろう。「支那は吾人の唯一の同胞なり」と高山が語るときには、ナショナリズムが他民族に対してもつ偏狭性は、人種対立の前では克服されたかのようにさえ見えるのである⁽¹⁹⁾。

一方、政治指導者たちはどうであったろうか。先に筆者は、当時の日本外交の政策決定者である元老たちが人種に基づく異質論に敏感に（言い方を変えれば過剰に）反応したと述べたが、同時に彼らは「黄禍」思想が日本国内に紹介されて人種対抗意識、とくに白人種全般にたいする過激な対抗意識が国内で生まれることを望まなかったし、恐れてさえいたと思われる。当時の元老たち、たとえば幕末の馬関戦争に際して、長州藩の攘夷方針撤回を説いた伊藤や井上馨には、「黄禍」思想に刺激されて新たな攘夷運動が起こることを避けたいという気持ちが強くあったであろうことは想像に難くない⁽²⁰⁾。また、元尊皇攘夷論者で、第一次大戦のときには、日中提携促進を唱えた山縣有朋にしても、人種戦争が起こり、日本が西洋列強を敵にまわすことを強く恐れていたという。

当時、ひとたび強力な白人排斥運動が起これば、不平等条約改定交渉も水泡に帰してしまうだろうし、西欧文明の摂取による近代化の道も閉ざされてしまう。当時の明治政府の指導者にとって、ナショナリズムは両刃の剣であったのではないだろうか。それは、一方では国民統合の原理として機能するものの、一方では人種対抗意識と結びついて、西洋排斥を引き起こしかねなかった。

彼らは「黄禍」というレッテルが、西洋において、日本、ひいてはアジアの近代化に対する警戒心を呼び起こすことを恐れると同時に、「黄禍」という西洋の「いわれなき」と

彼らは信じた) 非難が、国内の排西洋ナショナリズムを刺激することも恐れたのである。彼らは慎重に、国内のナショナリズムを過熱させない程度に活性化させながら、一方で列強間の力のバランスを巧みに利用しながら、文明国クラブの一員として、あるいは列強の一員として認められる道を模索したのである。明治の指導者たちを「透徹したリアリスト」と呼びたい誘惑にも駆られる。彼らがリアリストであったか否かは、定義の問題にもかわかることで、ここでは論じない。でも、少なくとも彼らは、後年に多く見られた「機会主義者」たちとは一線を画していたとは言えるかもしれない。

時代は下り、1907年5月、南満州鉄道総裁であった後藤新平との会談で、伊藤博文は汎アジア主義の構想を聞かされた。後藤は伊藤に、西太后に拝謁することを勧めた。その目的は、当時噂されていた米清同盟を防ぐために、中国側に世界情勢を伝え、「東洋人の東洋」つまり「大亞細亞(パンアジア)主義」の真実の意義について悟りを開かせることにあった。後藤が、大亞細亞主義について話をさらに進めると、伊藤は、後藤の言葉を遮った。

「いわゆる大アジア主義とは何であるか。およそこの種の論を口にするもの、国際の情偽を察しないで軽率な意見を述べたてるために、たちまち西洋人に誤解されて、黄禍論を叫ばせることになるのだ」⁽²¹⁾

人種戦争は避けるべき目標であった。「黄禍」論は、国外でも国内でも、厄介な問題であった。いっそ自然消滅してくれれば一番よかったのである。小松緑は、日露戦争の帰趨がほぼ日本の勝利に終わりそうな形勢のなかで、「黄禍」論について筆を執り、それが自然消滅の運命を免れ得ないと書いた。しかし、それは多分に希望的観測であったと言った方がよかったかもしれない。

II. 知識人の対応

1. 森鷗外の「黄禍論梗概」をめぐって

日本の知識人で「黄禍」論に早くから注目した一人に、森鷗外がいたことはよく知られている。鷗外は明治36年(1903年)11月末近くに、早稲田大学で「黄禍論梗概」という課外講義をおこなった。日露戦争開戦にあと2か月と少しという時期である。講義内容は、翌明治37年(1904年)5月、日露戦争のさなかに単行本として出版された。この『黄禍論梗概』は、当時の日本人に「黄禍」論を周知するにあたって、大きな役割を果たしたと思

われる。

この著作は、梗概という題名が示しているように、ドイツの学者ヘルマン・フォン・サムソン＝ヒンメルスチェルナの『道徳問題としての黄禍』（1902年）という著作の内容紹介とそれに対する鷗外自身の批判からなっている。

はじめに、鷗外は「黄禍」と言う語句が、「白人種と黄色人種との争闘から、新たに生まれて来た語」であり、「白人の側で黄色人に対して抱いて居る感情を表して居る」と指摘し、続けてこう述べている。

……吾人黄色人は、先頃の北清事件でのように、往々白人等と轡を並べて進んで、却つて他の黄色種族と争うような勢になって居りますが、又現に英国と同盟して、東洋の平和を維持しようと勉めて居りますが、此同盟国や我邦に対して昔から多くの同情を持って居る米国は姑く置くとして、一般の白人種は我國人と他の黄色人とを一くるめにして、これに対して一種の厭悪若くは猜疑の念をなして居るのでありますから、吾人は嫌でも白人と反対に立つ運命を持って居ることを自覚せねばなりません、これを自覚すれば、所謂黄禍の研究は即ち敵情の偵察でありまして、兵家に申させると、彼を知る一端なのであります⁽²²⁾。(傍点筆者)

この鷗外の導入部分でのコメントは、この梗概の目的以上のものを物語っているように思われ、いくつかの点で興味深い。

第一に、英米のアングロサクソン諸国は、「姑く置くとして」と例外としていることである（その頃、島田三郎も同様のスタンスをとった）。しかし、「黄禍」論にかんして、英米は必ずしも例外ではないのである。イギリス人ピアソンが書いた『国民的生活及び品性』は、「黄禍」論の古典とも呼ばれていたし、米国には「黄禍」と結びつく反東洋人感情（特に西海岸の中国系移民に対する排斥感情）が、19世紀後半から存在していた。鷗外とて、アングロサクソンが例外とならないことを知らないではなかったろうが、これら友好国の潜在的な「黄禍」感情を刺激するのはまずいと考えたのであろう。同時に英米の側にも、日露戦争前（そして戦中）の世論には、「黄禍」の脅威をあからさまに説く意見はあまり見られない。

ちなみに鷗外はこの著作を取りあげた理由を次のように述べている。日露の間には戦争が避けられないと思われるなかで、日本が負けた場合には、白人は「黄禍」の一部を未然に防いだとして凱歌をあげ、日本が勝った場合には、究極の手段として黄禍論を持ち出して、

その勝利の成果を可能な限り少なくしようとするのではないか。だから「黄禍論を研究するのは、吾人の急務」⁽²³⁾ではないかというのである。これは後の日露戦争中に詠まれた『うた日記』の一節「勝たば黄禍 負けば野蛮」⁽²⁴⁾につながって行く。

第二は、この論述に強烈な国民的プライドがかいま見えることである。国民的プライドは、人種対抗意識と表裏一体の関係にある。しかも、人種対抗意識とナショナリズムは、前にも述べたように、理論的にはともかく、実際には区別しがたいところがある。そのような好例がここには見られる。鷗外の叙述には、アングロサクソンを除く白人に対する対抗意識とともに、同じ黄色人種に対する「差別意識」がかいま見えると行ってよいのではないだろうか。「我國人と他の黄色人とを一くるめにして」と述べたとき、鷗外の頭にあったのは、「吾人黄色人」は「他の黄色人」とは別であるという強烈なナショナル・プライドである。鷗外は確かに白人の「黄禍」意識に対して怒っていたが、同時に日本人が中国人などの他の黄色人種と同等に扱われたことに対しても、ひどく怒っていたのである。

数ある「黄禍」について述べた著作のなかでも、とくにこのサムソン＝ヒンメルスチェルナの著作『道徳問題としての黄禍』を選んだことも、このような鷗外のナショナル・プライドを大いに刺激する結果となったに違いない。この書物の凡例で鷗外は、黄禍論はそのそれぞれの主張者に共通の立脚点がなく、従ってこの本もただ「衆論中の一」であるに過ぎないが、しかし読者はほぼこれによって「黄禍論の何者たるを窺うことを得べし」と述べている⁽²⁵⁾。概略が分かると述べていることからしても、どうも鷗外はこの著作の論議を「黄禍」論の紹介に適した、一般的な、ある意味では標準的な論議であると思こんでいたようである。しかし、果たしてそう言えるかは大いに疑問である。というのは、このドイツ人の著者は、いささか「偏った」見方を持っているからである。

サムソン＝ヒンメルスチェルナの著作の多くの部分は（鷗外の梗概によれば）、中国と日本の比較で占められている。膨大な人口、広大な領土はもとより、中国は道徳性、精神力、政治、教育、農業、産業、文明といった点で、おおきな利点を有している。これと対照的に、あらゆる点で日本人は中国人に劣っているとサムソン＝ヒンメルスチェルナは述べている。日本人には思考能力がない、だから西洋の科学技術を模倣するのである。古来特有の道徳性を有していないので、日本人は最悪のタイプの物質主義者である。日本人が軍事的気風に富んでいるというのも真実でない。日本人が戦争を好むように見えるのは、日本人の精神に平均を失っているところがあって容易に喧嘩を始めるに過ぎない。日本の教育はエリートだけのものである。日本の商人は信用がおけない。ほかにも宗教、農業、政治といった分野でも、中国の日本に対する優位性が説かれている。また日本の開化は、

ヨーロッパの開化を学んだもので、国民が自分で作ったものでなく、また開化の学び方も不十分であったとも述べている。このような比較を通して、サムソン＝ヒンメルスチエルナは、「ヨーロッパ人は既に日本の黄禍を被って居る」のであり、さらに日本よりも土地も広く人口も多い中国が、日本のごとく動き出して来たらどうであろうか、と言うのである⁽²⁶⁾。

この議論に特徴的なことは、中国を高く評価し、一方で対照的に日本を否定的に評価するいささか偏った見方である。鷗外は、まさにこの点に苛立って、強いて中国を持ち上げて「理想化とも言うべき程度に達して居る」と指摘する一方で、日本にたいする評価は抑えられるだけ抑えて、「穴探しに陥って」と述べている。鷗外はさらに、これは中国に「心酔して日本を憎悪するものに相違ありません」と述べて、その憎悪の理由を、日本が当面の敵であることに求めている。鷗外のたとえでは、西洋人は日本人と角力を取りながら、大きな中国人の影法師を横目に睨んで恐れているということになる。さらに鷗外は、こう付け加えて、この梗概を結んでいる。

日本人を恐れて黄禍論を唱え出しながら、なあと、日本人がこわいものかと言って居るのでござります。支那人がこわいものになるだろうというのは、差し当たり影法師に過ぎませぬ。所詮黄禍論というものは一の臆病論だということは、大略御了解になりましたらうと存じます⁽²⁷⁾。(傍点、筆者)

これらの鷗外の議論に「ナショナリズムの高ぶり」を感じるのは、私だけであろうか。確かにサムソン＝ヒンメルスチエルナの議論には、日本についてあら探しに陥っている部分が多いし、根拠も貧弱である。しかし、彼が日本を憎悪していたとまで言い切れるだろうか。また、「日本人を恐れて黄禍論を唱え出しながら」と西洋人について述べているが、「黄禍」論の根底には、まさに巨大な領土と膨大な人口を擁する中国の覚醒の脅威がある。サムソン＝ヒンメルスチエルナが引用している文献（リヒトホーフエン、フォン・ブラント）から推察しても、彼の中国観は1860年以降から始まった中国観の修正の流れ（すなわち停滞の象徴から、中国の潜在能力を評価する動き）の一環としても見ることができる。いずれにしろ、中国の覚醒の脅威の下地となった中国の潜在力は、清国を破った日本人にはともかく、ヨーロッパ人の目には大きなものと映っていたのである。だから、この「黄禍」論が、単に「日本人を恐れて」言い出されたのではないことは、明らかであると言ってよいだろう。

鷗外は『黄禍論梗概』で、西洋にたいして明確な批判をおこなっている。たとえば、罪は西洋人にあるのであり、「黄色人が白人を圧倒するのは正理の勝利で、彼は黄禍などとは言わずに、黄福とでも言って、有り難く所謂支那に向って踵を施す改良策を行うが好いではありませんか」と強く述べている⁽²⁸⁾。このように鷗外は、「黄禍」論に反駁を加えながら、一方では先に述べたように中国の過大評価と日本の過小評価にたいして強い不満を述べている。この『梗概』は、「黄禍」論にたいして、いささか「偏った」理解を国民に提供するものにならなかったろうか。黄禍論では、中国が不当に高く評価され、日本が貶められているというような理解を植え付ける結果にならなかったろうか。いずれにしろ、鷗外の議論は、意図するしないは別として、日本人の国民的プライドを大いに刺激したのではないかと思われる。鷗外の議論にも、「黄禍があるとすれば、不能の中国ではなく、新興強国の日本であらねばならない」という伊藤の見方と同様の、逆説的な反応が見られるように思う。

2. 黄色をめぐる——中国知識人・革命家との対比

「黄禍」論には、白人種の黄色人種に対する人種差別に基づく排斥論というイメージがつきまとっている。その点を否定するものではないが、より具体的に見ると、当時の「黄禍」論の中心主題の多くは、黄色人種の国でも、特に膨大な人口と豊富な資源を持つ「眠れる大国」中国の覚醒に対する脅威であった。覚醒とは近代化と言い換えてもよいだろう。日露戦争以前にはその覚醒の指導者として、日本、あるいはロシアが中国と同盟する脅威や、中国の内からの覚醒の脅威が声高に語られたのであった。この点から見ると、「黄禍」論は中国の将来性を探る中国論としての性格を持っている。また、日本の近代化とその中国への影響を説くという点からすると、非西欧地域の近代化論としての性格もあわせ持っていた。つまり、西洋と異質な文明が西洋的な近代化を遂げることが、西洋にどのような影響をもたらすのかということが、ここでは問題とされているのである。

このように見ると、「黄禍」は近代的な概念であることが分かるであろう。「黄禍」はともすれば、野蛮な黄色人種という侮蔑的なイメージで語られ、そのように受け止められることが多かったが、実際にはその野蛮な、あるいは別の言い方をすれば異質な黄色人種（中でも日本と中国）が西洋的な近代化を達成することが、脅威の本質なのである。その意味では、ロシアのアナキスト、バクーニンをこの近代的概念としての「黄禍」を説いた先駆者として位置付けることは、当を得ていると言えるだろう。バクーニンが言うように、ただの野蛮人ならば、幾ら数で勝っていても近代的な武力を有する西欧には本当の脅威で

はない。問題は、この野蛮人が西洋と同じ近代的な武力を有した場合なのである。

世紀の転換期に「黄禍」という評価に直面したのは、日本人ばかりではなく、中国人もそうであった。中国の知識人・革命家の対応には、日本とは異なるものがあっただろうか。

カイザーの寓意画に触れて、「黄禍」と題した小論のなかで当時を回想して魯迅はこう記している。

彼〔ドイツ皇帝〕は絵も一枚描いた。それはローマ時代の装束をつけた兵士が、東方から西へとやってきた一人の男の侵入を防いでいる図である。ところが、くだんの男は孔子ではなく、なんと仏陀であるから中国人はまったく一杯食わされていたわけである⁽²⁹⁾。

魯迅の目には、そして中国人一般にとっても、中国を象徴するのは、仏陀ではなく、孔子でなければならなかった。だから「一杯食わされた」と感じたのである。しかし、なぜそのように感じたのか。まるで、「黄禍」と目されなくてがっかりしているようではないか。そうなのである。魯迅も指摘しているように、当時の中国人の一部には、「黄禍」と目されることによって、プライドをくすぐられるように感じた者もいたのである⁽³⁰⁾。つまり「英雄の中にはこの語を聞くとちょうど白人に『眠れる獅子』とおだてあげられて悦に入ったように、長い間欧州の主人たらんことを心に準備している者もいた」のである。

実際、「黄禍」論は、脅威論であるから、とかくその脅威を誇張するために過大評価に陥る傾向が強かった。それでなくても、中国の覚醒の脅威を西洋が説くことは、弱体著しい清国を見れば、かなりの過大評価であったと言えるかもしれない。しかし、プライドをくすぐられるだけでは足りずに、この「黄禍」論を、ナショナリズムを刺激する起爆剤として利用する論法も広く用いられた。魯迅は、このような論法に批判的であったが、こう書いている。

このほかにまた、……、人類に進化する以前の性にもどってしまった者がある。私はかつてその一、二の例を詩歌の中に見たことがあるが、その歌の大意は、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世の「黄禍」の説を借りて、自ら豪傑を気取るものであって、声を張り上げて歌うには、ロンドンを、はたローマを破壊せん、パリ一地はもって淫楽の用に供すべし——と。「黄禍」の説を唱える者は、黄色人種をもって野獣に擬するのであるが、それでも、そのいうところはこれほどはげしくはないのである⁽³¹⁾。

これは「黄禍」論を逆用して中国に生じた議論が、「黄禍」論以上に過激であったことを物語っている。続いて魯迅は、祖国の勇者たちに告げる。まずその力を自国防衛に用い、無辜の国を侵略するのに用いてはならない。自国の独立の基礎が固まり、余力があれば、自由のために精神を振るい立たせ、圧制を転覆し、これを天地の間から追放すべきである。危うい国を助け、友邦を独立させ、「ついでその他におよび、人間世界を自由具足の世界となし、虎視眈々たる白色人種の手からその奴隷を解放した時にこそ、『黄禍』ははじめて実現するのである」⁽³²⁾（傍点、筆者）と。

ここで「黄禍」の実現を魯迅が説いていることは、かならずしも「黄禍」を否定的なイメージとしてばかり捉えていたのではないことを明らかにしている。自国を防衛し、侵略を行わず、自由の名のもとに圧制を覆し、白人種の手から奴隷を解放したとき、「黄禍」が実現するというのは、「黄禍」が魯迅の理想とする目標であったと言ってもいいだろう。

ところで、「黄禍」を逆手にとった過激なナショナリズムは、たとえば鄒容が、1903年に表した『革命軍』に典型的に見られる。「わが皇漢民族四億の男女同胞よ、……革命せよ」と呼びかけた後、さらに彼はこう書いている。

君は黄禍の先駆けであり、君には民族としての力がある。君の政治は君自身がこれを司れ。君の法律は君自身がこれを守れ。君の実業は君自身がこれを経営せよ。君の軍備は君自身がこれを整えよ⁽³³⁾。

この文書を魯迅は高く評価したと言われるが、ここでも「黄禍」の先駆けとなることが、賞揚されている。つまり、「黄禍」は、これらの中国知識人や革命家にとっては、排斥すべきものではなく、目標にさえ成りうるものであったのである。

短期間の日本留学の後、鄒容は若干18歳でこれを執筆した。彼は、ルソーの民約論に影響を受けた共和主義者であり、君主専制体制を打破することにこの文章の力点は置かれている。鄒容は、この『革命軍』がもとで、投獄され獄死する。この書は、100万部近く刊行されたとも言われ、辛亥革命前の初期革命派を代表する著作の一つに数えられている。

1904年、この『革命軍』を1万1千部携えて、サンフランシスコに乗り込み、米本土の華僑に配布し、革命派の組織化をはかろうとしたのが孫文であった。この頃、孫文も英文パンフレットのなかで「黄禍」にふれている。それは『中国問題の真の解決』という文書で、1万部印刷され、米国本土で配布された。中国人むけに配布した『革命軍』では、「君は黄禍の先駆けであり」と述べられていたが、このパンフレットで孫文は「黄禍」に反駁

を加えている。その部分の結論は、「黄禍がけっきょくは黄福に転じるだろう」という鷗外と同じ様な文句であるが、内容は鷗外よりも穏やかである。「黄禍」論にたいして、孫文は「中国人は生来勤勉で、平和的で、法を愛する民族である。彼らは決して侵略的な人種ではない」と述べる。かつて戦争をしたとしても、それは自衛のための戦争であり、中国人が平和の脅威となるのは、外国による訓練を受けて、その国の野心を満足させる道具として利用される場合だけである。ほおっておけば、「彼らは世界で最も平和な民族であることを証明するだろう」⁽³⁴⁾。

また経済的な意味でも、「中国の覚醒と開明的な政府の樹立とは、中国人にとってのみならず、広く世界にとっても有益である」と孫文は説く。中国全土が外国貿易にたいし開かれ、鉄道が敷かれ、資源が開発され、人々は豊かになり、生活水準は向上する。貿易も現在の倍になるだろう。孫文はこんなバラ色の中国像を米国民に描いてみせて、「黄禍がけっきょくは黄福に転じるだろう」と述べている⁽³⁵⁾。ここには、排外的なナショナリズムの毒気は、見事なまでに消毒されている。それは、このパンフレットが、米国民を讀者として想定して書かれたものだからであろう。

ところで改革派の梁啓超は、孫文とは異なっていた。彼は「黄禍」の脅威を人種意識を高めることに利用しようとしたし、「黄禍」の脅威を否定するどころか、それを強調さえしたのである。梁は言う。白人種は傲慢できつい仕事を嫌うが、それに対して黄色人種は、つつましやかで勤勉である。黄色人種は文明の創始者であり、黄帝の子孫である⁽³⁶⁾。

彼はさらにこうも言っている。漢民族は、世界を統一できる。オーストラリアもアメリカも、支配人種の黄色人種の植民地になるであろう⁽³⁷⁾。「我々中国人は、地球上で最も拡張的で精力的な人種である。英国、フランスの両国とも、警戒している。なぜならば、我が人種は抑制できず、世界中に広がるであろうから。彼らは我々がいつの日か、ヨーロッパに流れ込み侵略するとさえ恐れている」⁽³⁸⁾。

それにしても、この「黄禍」を目標としたり、「黄禍」の脅威をあえて強調しようとするような考え方が現れるのは、一体どのような理由からであろうか。一つには、清末の当時、中国がかならずしも日本と同じような西洋文明の摂取による近代化を目標としていなかったことがあげられるだろう。西洋と同等の地位を目指す「新日本」にとっては、「黄禍」のレッテルは野蛮の象徴であり、受け入れ難いものであったに違いない。それと比べて、中国の知識人は、西洋文明の摂取による近代化という物差しを絶対化せず、どこか超然としたところがあったようにも見える。だから、この脅威論をむしろ歓迎さえして、逆手にとって利用しようとする考えも表れたのかもしれない。

もう一つ、いささか大胆な推測をすれば、中国人にとって、「黄禍」の「黄」の受けとめ方が、日本人と根本的に異なることも、両者の対応を分けたのではなかろうか。中国では、「黄」は、黄河の黄であり、黄海の黄であり、後漢時代に遡れば、「黄巾の乱」(184年)の黄であった。「黄巾の乱」は圧制に苦しむ農民が、張角を首領として河北で起こした農民反乱である。この乱に立ち上がった農民はすべて、黄巾で頭を覆っていたという。なぜそれが黄巾であったのか。古来中国では、黄色は神聖な力の象徴とされてきた。この乱では、「蒼天すでに死す、黄天まさにたつべし」と唱えられた。黄色の神聖な力にあやかろうとしたのである。また蜂起した農民たちは、張角の起こした太平道という後の道教につながる呪法的宗教を信じていたが、そこで奉じられていたのは黄老であった。老は老子の老であり、黄は黄帝の黄であった。そうである。この黄が黄帝の黄であったことは、決定的に重要であったと思われる。

黄帝は中国の伝説上の皇帝であり、三皇五帝の一人で中国初代の王である。およそ前2700年頃の王と伝えられている。黄帝は、民族統合のシンボルであり、祖先崇拜の信仰対象として長く崇められて来た。その黄帝の黄色は神聖な力の象徴であった。それ故に、中国の王族の御用色ともなった。また中国の神獣神話の五獣の一つ黄龍は、まさに方位の中央を占め、このことから黄色の中心性がうかがえる。さらに黄色は土地、とくに神聖な土地に通じており、黒や赤の野蛮人の土地と区別され、白人から守られるべき存在であった⁽³⁹⁾。

要約すれば、中国人にとって「黄」は特別な色であり、「黄禍」はまさに、ナショナル・プライドを直接刺激する効果が非常に強かったと思われるのである。

一方で、当時の日本人にとって「黄禍」の黄は、まさしく「黄色人種」の黄色以外の何者でもなかった。ここではこの世紀の転換期にロンドンにいた同時代人の夏目漱石の述懐を引くにとどめよう。「往来にて向うから背の低き妙なきたなき奴が来たと思えば我姿の鏡にうつりしなり。我々の黄なるは当地に来て始めて成程と合点するなり」⁽⁴⁰⁾。ロンドン日記の漱石の黄色人種としての劣等意識を表していると言われる有名な一節である。同様の意識は、妻への手紙にも見られる。「日本にいる内はかくまで黄色とは思はざりしが当地にきて見ると自ら己れの黄色なるに愛想をつかし申候」⁽⁴¹⁾と。最初に紹介した伊藤博文の訪英のときも、漱石はロンドンにいた。日英同盟締結後、在留邦人が林公使の同盟斡旋の労をねぎらうため記念品を贈呈するとして寄付を募ったときには、漱石は苦しい懐からしぶしぶと五円寄付している。そのことを書いた岳父宛の手紙で、漱石は日英同盟締結に際しての日本での喜びようを評して「あたかも貧人が富家と縁組を取結びたる喜しさの余り

鐘太鼓を叩きて村中かけ廻るやうなものにも候はん」と皮肉っている。この黄色人種と白色人種間の最初の「対等」同盟に喜ぶ日本国民を尻目に、「固より今日国際上の事は道義よりも利益を主に致しをり候へば」と述べて、この位のことで満足するのでは、はなはだ心許ないとも漱石は書き送っている⁽⁴²⁾。この頃の日記には、中国人との関係で、こうも書いている。

日本人を覩て支那人といはれると厭がるは如何。支那人は日本人よりも遙かに名誉ある国民なり。ただ不幸にして目下不振の有様に沈倫せるなり。心ある人は日本人と呼ばれるよりも支那人といはるるを名誉とすべきなり。仮令然らざるにもせよ日本は今までどれほど支那の厄介になりしか、少しは考えて見るがよかろう⁽⁴³⁾。

これを先の鷗外の「黄禍」論に対する対応と比較してみると、違いは明瞭であろう。漱石のような考えは、当時の日本の知識人・政治家にとっては特殊なものであったろうか。漱石のような「開化の被害者」意識を持っていなくても、明治の知識人・政治家のなかには、たとえ西洋文明を積極的に摂取して近代化を果たし、日清戦争に勝利しても、まだなお千年以上も文明における教師であった中国にたいして、多少なりとも敬愛の気持ちがなかつたとは言えないだろう。また、西洋の物質文明に倦み始めていた西洋の知識人が、この頃、中国を再評価するようになったのも、西洋文明の荒波を受けながらも変わることのない中国人という「遙かに名誉ある国民」のどこか超然としたところに、それ故に惹かれるものがあつたのではないだろうか。

む す び

以上見てきたように、中国では、「黄禍」論における中国に対する過大評価への諧謔も生まれているし、またその脅威論を逆手に取り、ナショナル・プライドを鼓舞する意見まで表れた。逆説的ではあるが、「黄禍」を目指すような意見さえ見られたのである。

これに対して日本では、黄禍論は政府から在野の批評家まで含めて、反駁と否定の対象でしかなかった。しかも、時としてその批判は、白人の人種主義に対する反発から、日本あるいはアジアまで視野に入れた排西欧的ナショナリズムの自己肯定に結びつくこともあつた。たとえば、大正5年(1916年)に出版された小寺謙吉の『大亞細亞主義論』⁽⁴⁴⁾は、黄禍論を分析し批判すると同時に、排西欧的なアジア主義を説いている。つまり、黄禍論

を利用したのは、ヴィルヘルム二世のような排アジア的人種主義者ばかりではなく、排西洋的なナショナリストもそれを白人の人種主義の動かぬ証拠として、自らの立場の補強のために利用したのである。

このように日本における黄禍論に対する反応には、感情的反発からナショナリズムの鼓舞に至る複雑な性格が見てとれる。そこには、反差別が同時に強烈な逆差別を肯定するという思想上の隘路も見える。だが、少なくとも明治の指導者たちは、「黄禍」への反論が、国内で排西洋的なナショナリズムに転換することを恐れ、その意味では自重を重ねたのである。しかし、彼らの危惧は、もっと後の時代になって、具体化してしまったと言ってよいかもわからない。

《注》

引用文中の表現には、一部、今日では不穏当なものもあるが、引用であることからそのまま使用した。旧字体は、なるべく新字体に改めたが、正確を期するために残した部分もある。また当時の雑誌にはしばしば、一重丸もしくは二重丸の圏点が見られるが、原則として省略した。

本稿は、著者が以前に発表した「黄禍論の再解釈—カイザー・ヴィルヘルム二世の寓意画をめぐる一考察」『国際大学アジア発展研究所ニューズレター』（第3号，1993年，3～6頁）という小論の内容をさらに深めて考察したものである。

- (1) 拙著「黄禍論の再解釈—カイザー・ヴィルヘルム二世の寓意画をめぐる一考察」『国際大学アジア発展研究所ニューズレター』（第3号，1993年，3～6頁）および、拙著「世紀の終りと『黄禍』の誕生—カイザーとその寓意画，および三国干渉—」学校法人城西大学『国際文化研究所紀要』（第3号，1997年7月，1～23頁）。
- (2) この伊藤の欧州行については、春畝公追頌会（小松緑編）『伊藤博文伝（下巻）』（春畝公追頌会，1940年）515～58頁を主に参照。また、伊藤がカイザーの寓意画を目にするエピソードは，“Asia as a Conqueror,” *Review of Reviews* June 1904:551を参照した。なおこの論評には署名がないが、著者は、その親露的な内容や、自らが筆を執っていたことから、当時の同誌の主筆であったW・T・ステッドであることは間違いないと思われる。また、この論評には伊藤と名指しはされていないが、「1，2年前に、ある傑出した日本人政治家がロンドンにいるとき、モーブレイ・ハウスを訪れた」と本文にある。2年前なら1902年となるし、また伊藤以降に「日本の傑出した政治家」がロンドンに滞在したこともないことから伊藤と推定した。
- (3) ドイツ人医師エルウィン・ベルツに語った言葉。次を参照。Erwin Baelz, *Awakening Japan: The Diary of a German Doctor: Erwin Baelz*, trans. anon., ed. Toku Baelz (1932; rpt. Bloomington: Indiana Univ. Press, 1974) 222.
- (4) Heinz Gollwitzer, *Die gelbe Gefahr: Geschichte eines Schlagworts Studien zum imperialistischen Denken* (Göttingen: Vondenhoeck und Ruprecht, 1962) 206-208. また『北ドイツ新聞』の記事は、N. F. Grant, ed., *The Kaiser's Letters to the Tsar* (London: Hodder and Stoughton, [1920]) 18-19.
- (5) 宮内庁『明治天皇紀 第九』（吉川弘文館，1973年）32～33頁。
- (6) 「陸奥外相辞職の風説」『横浜毎日新聞』1896年3月19日。なお原題は『毎日新聞』である。

- (7) 「陸奥外相の大磯行」『横浜毎日新聞』1896年3月15日。正確には午前9時20分に新橋発の列車で大磯に向かったとある。
- (8) 「外相の参内」『横浜毎日新聞』1896年3月15日。
- (9) 「外相邸の会議」「一昨夜元勳会の議題」『横浜毎日新聞』1896年3月15日。
- (10) “The Far Eastern Situation from a German Standpoint,” *American Monthly Review of Reviews* Jan. 1896: 3-4. ちなみに先の *Review of Reviews* とは姉妹紙の関係にあるが、別のものである。
- (11) “The Emperor William’s Cartoon,” cartoon, *American Monthly Review of Reviews* Jan. 1896: 2.
- (12) 小松緑「対外策」『太陽』第2巻, 第9号 [1896年5月20日号], 15~20頁。
- (13) 『ベル・メル・ガゼット』紙は, 前述のW・T・ステッドが1883年から主筆となり, ニュー・ジャーナリズムの手法を取り入れて注目された。とくに1885年に掲載された幼少女などの人身売買を告発する記事は, 英国社会に衝撃を与えた。彼は1890年に英国版の『レビュー・オブ・レビューズ』誌を創刊し, 同年に同紙を去った。なお先に紹介した米国版『レビュー・オブ・レビューズ』誌は, 姉妹紙として1891年に創刊されたものである。Harold Herd, *The March of Journalism: The Story of the British Press from 1622 to the Present Day* (London: George Allen & Unwin, 1952) 227-31.
- (14) 寺尾亨「日清戦争中の欧州列国」『太陽』第2巻, 第7号 [1896年4月20日号], 11頁。
- (15) 寺尾亨, 前掲, 11~12頁。
- (16) 有賀長雄「東亞外交の十大問題」『外交時報』1898年, 第1巻, 第6号, 29~30頁。答える代わりに, 有賀は重要な問題として, 経済問題と外交の関係を論じている。有賀によれば, 立憲国家外交の唯一の目的は, 国民の経済上の進路を開くことにある。前述の二つの外交方針のいずれを取ったとしても, 「進取主義の外交」を行えば, 必ず争いに巻き込まれる。それは軍備拡張の道につながる。西洋諸国はすでに国内の経済発展が極点に達しているので仕方がないが, 日本はまだ国力を国内事業に注ぐべきである (前掲, 30~32頁)。「進取主義」を帝国主義と置き換えて読むと, より一層分かりやすいかもしれない。
- (17) 有賀長雄「支那保全論」『外交時報』1898年, 第1巻, 第11号, 40頁。ちなみに有賀は, この論説のおよそ15年後の1913年に袁世凱の法律顧問となり, 憲法制定に尽力した。
- (18) 近衛篤磨「同人種同盟, 附支那問題研究の必要」『太陽』明治31年 (1898年) 1月1日号。
- (19) 高山樗牛「人種競争として見たる極東問題」(明治31年 (1898年) 1月稿)『文明史雑論』所収; 再録『樗牛全集 第5巻』(姉崎嘲風・笹川臨風編, 初版1930年, 復刻第2刷, 日本図書センター, 1994年) 349頁。
- (20) 幕末に伊藤, 井上は, 尊皇攘夷運動に加わったが, ロンドン留学後, 攘夷方針の無謀を悟った。二人は, 長州藩による外国船砲撃事件にあたって, 急遽帰国して長州藩の攘夷方針転換を説得したが実らず, 下関は4国連合艦隊の報復砲撃を受け, 長州藩は降服した。
- (21) 後藤新平 (手記)「伊藤公満州行事情」小松緑編『伊藤公全集 (第3巻)』(伊藤公全集刊行会, 1927年) 74~75頁。伊藤の発言は, 後藤の手記に要約されたものを, 表記とともに現代的な会話形式に改めた。この会談は厳島で三日間に亘って行われた。初日に大アジア主義の問題で激論となったが, 後藤によれば, 二日目に伊藤は, 大アジア主義そのものの意義についてはもとより同意を惜しまないが, これを露骨に発表して, いらぬ疑惑を引き起こすことがないよう言動を慎むよう述べたと言う。この会談は, 次に後藤の新旧大陸対峙論をめぐって, 再度紛糾した。これは, 新大陸アメリカに対して, ユーラシア大陸の東西に位置するヨーロッパとアジアが一致して対抗し, また中国の保全を図るというものであった。後藤の記録では, 最終的に伊藤は後藤の考えを了承したようであるが, 実際のと

- ころ伊藤がどのような計画を頭に描いていたのかは、定かではない。その後、西太后が亡くなり、中国情勢が流動的になると後藤は、伊藤にロシアのココフツォフ蔵相との会談を勧めて、これを設定した。会談は1909年10月26日、ハルビン駅構内の東清鉄道列車内で行われた。会談後、プラットフォームに降り立った伊藤は、朝鮮人の安重根に暗殺された。後藤、前掲、71～89頁、ほかに小松緑『明治外交秘話』（原書房、1976年）258～62頁、参照。
- (22) 森林太郎『黄禍論梗概』（春陽堂、1904年）；再録『鷗外全集 第25巻』（岩波書店、1973年）539～540頁。
- (23) 森林太郎、前掲、537頁。
- (24) 森林太郎『うた日記』（春陽堂、1907年）；再録『鷗外全集 第19巻』（岩波書店、1973年）161～62頁。
- (25) 森林太郎、前掲、『黄禍論梗概』、537頁。
- (26) 森林太郎、前掲、『黄禍論梗概』、548～63頁。
- (27) 森林太郎、前掲、『黄禍論梗概』、567～68頁。
- (28) 森林太郎、前掲、『黄禍論梗概』、567頁。
- (29) 魯迅（三宝政美訳）「黄禍」『准風月談』；再録『魯迅全集 7』（学習研究社、1986年）371頁。ちなみにこの文書の初出は、「自由談」『申報』1933年10月20日。
- (30) 魯迅、前掲、370頁。
- (31) 魯迅（伊藤虎丸訳）「破悪声論」（1908年）；再録『魯迅全集 10』（学習研究社、1986年）69頁。ちなみに「破悪声論」は、日本留学中に留学生雑誌『河南』に発表された。
- (32) 魯迅、前掲、「破悪声論」、69～70頁。
- (33) 雛容『革命軍』（1903年）
- (34) 孫文（山田敬三訳）『中国問題の真の解決』（1904年）；再録『孫文選集 第3巻』（社会思想社、1989年）229～30、236～37頁。
- (35) 孫文、前掲、237頁。
- (36) Liang Qichao 梁啓超, “Lun Zhongguo renzhong zhi jianglai,” 「論中國人種之将来」 Yinbingshi wenji 2, 3: 52. 梁については、引用文献も含めて、Frank Dikötter, *The Discourse of Race in Modern China* (London: Hurst, 1992) 82-83を参照した。
- (37) Liang Qichao 梁啓超, “Zhongguoshi xulun,” 「中國史叙論」 Yinbingshi wenji 3, 6: 6; “Lun Shongguo xueshu sixiang bianqian zhi dashi,” 「論中國學術思想變遷之大勢」 *Yinbingshi wenji* 3, 7: 4.
- (38) Liang Qichao 梁啓超, “Lun Zhongguo guomin zhi pingge,” 「論中國國民之品格」 *Yinbingshi wenji* 5, 14: 1-5.
- (39) 以上の中国人と「黄」をめぐる考察は、次の文献を参照。Dikötter, 71および、王敏『中国人の「超」歴史発想——「食・職・色」5000年の研究』（東洋経済新報社、1995年）136～49、184～90頁。
- (40) 夏目金之助『漱石全集 第19巻』（岩波書店、1995年）44頁。1901年1月5日付け日記。
- (41) 夏目金之助『漱石全集 第22巻』（岩波書店、1996年）210頁。1901年1月22日付け書簡。
- (42) 夏目漱石（三好行雄編）「明治35年3月15日 中根重一宛」書簡『漱石文明論集』（岩波書店、1986年）332頁。
- (43) 夏目漱石（三好行雄編）「明治34年3月15日」日記『漱石文明論集』（岩波書店、1986年）304～305頁。
- (44) 小寺謙吉『大亞細亞主義論』（東京寶文館、1916年）。